



京大広報

No. 718

2016.1



新年名刺交換会を開催 —関連記事 本文4550ページ—

目次

新しい年を迎えて 総長 山極 壽一	4546
〈大学の動き〉	
京都賞高校フォーラムを開催	4548
第64回京都大学未来フォーラムを開催	4548
平成27年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式 を挙行	4549
新年名刺交換会を開催	4550
〈部局の動き〉	
寄附講座、寄附研究部門の設置、更新、延長	4551
〈寸言〉	
京都の星空を眺めて 河北 秀世	4555
〈随想〉	
クレイク先生のこと 名誉教授 中務 哲郎	4556
〈洛書〉	
心境の変化 大澤 志津江	4557
〈栄誉〉	
諸熊奎治 福井謙一記念研究センター FIFC リ サーチフェローが日本学士院会員に選ばれる	4558
竹内繁樹 工学研究科教授および神谷之康 情報 学研究科教授が大阪科学賞を受賞	4558

平成27年度医学教育等関係業務功労者の表彰	4560
〈話題〉	
島尻内閣府特命担当大臣(科学技術政策担当)が 医学部附属病院および桂キャンパスを視察	4560
JSPS「リスク評価に基づくアジア型統合的流域 管理のための研究教育拠点」第5回包括シン ポジウムを開催	4561
宇治キャンパスで総合防災訓練を実施	4561
環境学分野における教育・研究・ビジネスの 国際協働に関わる国際シンポジウムと、環境 学分野における教育・研究・ビジネスの国際 協働実践のための国際ワークショップを開催	4562
「『人間の安全保障』開発を目指した日アセアン 双方向人材育成プログラムの構築」がマレー シアで国際シンポジウムを開催	4563
松本 紘 前総長肖像画贈呈式を挙行	4563
能楽鑑賞会を開催	4564
〈訃報〉	4564

巻頭言

新しい年を迎えて

総長 山極 壽一

新年さるがやってきました。昔から各地でニホンザルは神の使いと見なされ、山岳信仰とともに畏敬の対象とされてきました。春になると山から下りてきて田の神に山の神の便りを伝え、秋になると山へ戻っていくとされ、その自在で活発な動きに人々は驚きの心を抱いたものです。今年はそのサルサルの能力にあやかりたいものです。

現在、地球上に暮らしている約300種のサルや類人猿からなる霊長類は、熱帯雨林を主たる生息地としています。熱帯雨林すなわちジャングルは、地上で最も生物多様性の高い生態系です。樹高40メートルを超える木々が構成する3次元の世界を縦横無尽に闊歩する霊長類は、地上を這い回る他の哺乳類と比べると抜きん出て広い視野を持っています。その霊長類の一員である人間は、その視野を地中、水中、宇宙にまで広げて新たな可能性を探ってきました。それはサルサルの時代に獲得した自在で自由な能力を基にしているのです。

私は京都大学の指針としてWINDOW構想を掲げ、野生的で賢い学生を育てることを全教職員の共通の目標としてきました。そのわかりやすい例として「大学はジャングルだ」という標語を作り、もっと大学を探検して多様な知の在り処を探り、それを利用して新しい知を創造しようと呼びかけてきました。ジャングルは多くの種がさまざまな関係を織り成しながら共存しています。互いに他の種種の能力や暮らし方を熟知していないのに、生態系として安定しています。大学とは多くの分野の研究者がジャングルの種のように共存しつつまとまりを維持している場所であり、私たちもサルのようにジャングルを自在に飛び歩きながら、それぞれの研究者が実らせた果実を味わおうという提案です。

京都大学は開学以来、自由の学風を伝統としてきました。京都帝国大学を創設した西園寺公望の別邸



清風荘で、昨年12月に京都大学と東京大学の執行部が勢ぞろいし、対面して懇談会を行いました。互いに歴史と学風を尊重しあいながら、現代の大学を取り巻く問題

を共有し、よりよい解決策や将来構想を立てるために協力していかうと考えたからです。京大と東大の学生気質がいぶん違うことも話題に上りました。東大生は日本の行く末を案じ、政治や経済の動きに高い関心を向けるのに対し、京大生は政治や実利の世界とは直接関係のない自由な発想を重視し、日本より世界へ目を向ける傾向が強いというのです。西園寺公望も第二の帝国大学を京都に置く際に、ドイツ、イギリス、アメリカなどの大学の動向を視察させ、自由な学風を持つ大学を作ることを基本的な考え方にすえたとされています。むろん私はこの学風を学生諸君に押し付ける気はありません。ただ、京大と東大が互いの個性を発揮しながら協力し合う中で、未来の世界を切り開く新しい種が芽生えるだろうと思うのです。

大学の教員にとって自由な学風とは、自由な研究と教育を意味すると私は思います。教員は自由に研究テーマを選び、責任を持ってそれを遂行するとともに、その成果を教育に生かす権利を保障されているのが大学です。しかし、そのあり方は今大きな変化にさらされています。昨年6月にドイツのハンブルクで開かれた世界学長会議で、どの国でも日本の大学と同じ問題を抱えていることを知りました。それは、大学への入学者が急増し、大学が一部のエリートエリートを養成するのではなく、社会の課題に応える技術を教える機能が求められるようになったこと。そして、国の財政が悪化し、教育や研究に対する十分な

支援が行えなくなったことです。そのため、各国の大学は産業界との連携を強めて技術指導を重視したカリキュラムを増やし、外部基金を増やし、授業料を上げて対応しようとしています。教員たちも基礎研究から応用研究重視のテーマに切り替えて資金獲得に走り、教科書を用いてより一般的な内容の講義を行うようになりました。大学ランキングも、それぞれの大学が高い授業料を払ってくれる海外の留学生を呼び込む手段となりつつあり、研究と教育はより合目的な傾向を強め、アカデミック・フリーダムが力を失いつつあるという懸念が語られました。

同じような状況下で、京都大学はどう歩むのか。アメリカ式のビジネス経営に移行することも、ドイツやフランスのように授業料を徴収せずに学生の大学間移動を促進することもできません。厳しい財政事情を切り盛りしながら自己資金を増やし、できるだけ自由の学風を守りつつ国際的な学術ハブとしての機能を強化し、大きく窓を開けて学生諸君を世界に送り出さねばなりません。そのために、これまでの1年を振り返り、新たな1年に臨むことを述べてみようと思います。

まず、昨年3月に竣工した国際科学イノベーション棟は、本学の研究者と京都府や京都市などの産官学が協力して現代の課題に応えるイノベーションを創出する施設です。すでに海外の大学とのシンポジウムも開催されており、海外とのハブ機能も果たしています。4月にはハイデルベルク大学のオフィスが開設され、両校で密接な交流が可能になりました。国際化は教職員にとっても学生にとっても喫緊の課題で、私も多くの学長会議に出席して対策を協議しました。ダブル・ディグリーやジョイント・ディグリーを促進するためには、共通の研究課題や質保証が先決で、そのために共同研究プロジェクトを立ち上げることが不可欠になります。京都大学が誇るオリジナルな学問を積極的に紹介していくことも必要だと考え、私も京大発の霊長類学を英語で発信するTEDやMOOCに参加しました。総合大学の

学長がMOOCで講義を配信するのは世界でも初めてということで、世界から多くの聴講者が登録し最後まで熱心に参加してくれました。

学生を対象とした最も大きな取り組みは特色入試を開始したことです。少人数を対象としましたが、各学部がそれぞれ特色を生かした高校生へのメッセージとなり、理学部では11倍を超える志願者が集まりました。今後、一般入試と組み合わせた特色入試の利点をさらに生かしていこうと考えています。学際融合コンテストや学生チャレンジコンテストは、対話を重視した自由の学風に基づき、おもしろい発想を競い合う試みです。両方ともこれまでの研究成果ではなく、これから実施する研究の面白さを競います。学生チャレンジコンテストはクラウドファンディングを使って、選別されたプロジェクトをウェブ上で公開し、出資者を募ります。新しい市民参加型の研究モデルになるのではないかと期待しています。

産官学連携事業としては、昨年11月に京都大学イノベーションキャピタル株式会社を設立し、将来有望なベンチャー事業に投資することになりました。また、現在品川にある京都大学東京オフィスを中心部へ移す計画で準備を進めています。京都近郊の企業経営者や産業界で活躍する京大卒業生とも頻繁に懇談会を開催し、人的交流や研究協力を推進しています。2022年の京都大学創立125周年を目途に大学基金を立ち上げ、同窓会組織を増やして寄附を呼びかけています。こうした活動を通じて自己資金を増やし、教育や研究の現場がさらに豊かになるように努力しています。

今年は京都大学の誇る先端的研究の国際ハブとなる高等研究院を立ち上げ、海外の拠点を増やし、京都の歴史ある文化や芸術と連携する京都アカデミア構想の実現へ向けて加速するつもりです。京都大学の自由な学風と自在な力を増すために、どうか皆さんの暖かいご協力をお願いいたします。

大学の動き

京都賞高校フォーラムを開催

11月13日(金)、百周年時計台記念館において、公益財団法人 稲盛財団との共催により、青少年育成プログラムのひとつとして、第31回京都賞高校フォーラムを開催した。



マイヨール博士との懇談

青少年育成プログラムとは、同財団が主催する京都賞授賞式および関連行事の期間(京都賞ウィーク)において実施される、小学生から高校生、大学生などの若い世代を対象にしたプログラムで、本学はその一部を同財団と共催している。

当日はフォーラムに先立ち、京都賞基礎科学部門地球科学・宇宙科学分野受賞者のミシェル・マイヨール博士と稲葉カヨ 国際担当理事・副学長、檜物省



マイヨール博士の講演

一 稲盛財団常務理事、姫田和仁 同事務局長が懇談した。

フォーラムでは、檜物常務理事による開会の挨拶の後、マイヨール博士より「宇宙を読み解く：物理学という素晴らしい道具」と題した講演が行われ、出席した京都府内の高校生約450名が熱心に聞き入った。

その後、マイヨール博士と高校生との質疑応答が行われ、活発なやり取りがあり、最後に稲葉理事・副学長が挨拶を行い、盛会のうちに終了した。

(総務部(渉外課))

第64回京都大学未来フォーラムを開催

12月2日(水)、本学工学部卒業・工学研究科修士課程修了生で新日鐵住金 株式会社相談役の友野 宏氏を講師に迎え、京都大学未来フォーラムが百周年



講演をする友野氏

時計台記念館において開催された。

「世界をリードする日本の鉄鋼産業 ―もの造りの現場第一線から―」と題した講演の中で友野氏は、日本の鉄鋼業が歩んできた歴史的背景や、日本が工業化と標準化に成功し、世界をリードする存在となったことなどをわかりやすく紹介し、成功のためには、たゆまぬ技術イノベーションへの挑戦が必要であると語られた。

参加者からは「技術と経営の二つの立場からの話は非常に新鮮であった」、「鉄鋼業の展望を理解することができた」、「成熟産業となりつつある鉄鋼業において、新たなイノベーションを目指す気概を感じることができた」などの感想が寄せられた。

(総務部(渉外課))

平成27年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式を挙

12月12日(土)、ホテル平安の森において、平成27年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式を挙

このスポーツ表彰は、京都大学体育会規約にある「本会は、京都大学における体育の向上、運動の普及を図り、あわせて本学学生の心身の錬磨、品性の陶冶に資し、もって学徳兼備にして有為の人材を作ることを目的とする」という理念を実践し、それにふさわしい貢献をした部員を表彰するものとして、平成19年度に設立されたものである。

優秀な成績を残した選手、大学から新しいスポーツを始め、実力を大きく向上させた選手、裏方として部を支えた選手・マネージャーも対象としている。

今回は体育会会長賞10名、優秀賞5名の計15名が小田滋晃 体育会長(農学研究科教授)より表彰を受けた。

体育会会長賞(10名)

所属クラブ	氏名
カヌー部	武田 淳 弘
ゴルフ部	笠松 大 悟
フェンシング部	大橋 由紀子
居合道部	牧野 優 作
硬式野球部	佐藤 駿 介
水泳部	佐藤 開 一
相撲部	古屋 皓 平
陸上競技部	石田 真 也
陸上競技部	平井 健太郎
陸上競技部	櫻井 大 介

体育会優秀賞(5名)

所属クラブ	氏名
アメリカンフットボール部	大塚 健 一
アメリカンフットボール部	白根 滉
フェンシング部	池端 菜 摘
女子バレーボール部	折原 恵 理
剣道部	杉岡 千 紘



体育会会長賞、体育会優秀賞の受賞者

(教育推進・学生支援部(厚生課))

新年名刺交換会を開催

平成28年1月5日(火)、恒例の新年名刺交換会を芝蘭会館山内ホールにおいて開催した。井村裕夫、長尾 真、尾池和夫の歴代総長をはじめ、多くの名誉教授、理事・副学長、監事、部局長、教職員など約180名の参加を得て、盛大に行われた。

まず、山極壽一 総長より、新年の挨拶が行われた。ニホンザルは山岳信仰では神の使いと見なされており、自在な動きが敬われている。甲年さるに因み、自由自在を目標にとの話から、自由の学風の京都大学が創立された背景が述べられた。今年は建学の精神に則り、京都大学の行く末を考えていかなければなら

ない年になること、財政問題をはじめとする様々な波が京都大学をはじめ国立大学に押し寄せており、京都大学はどういう色をもってこれから進んでいくべきか将来方針を決めていかなければならない時期にきていること、また、若者達が自由に世界へ旅立てるように、京都大学の歴史ある伝統というものを常に踏まえながら我々は道を誤ってはならないことなどが説明され、京都大学の持っている清新な心を常に抱きながら歩んで行きたいとの所感が述べられた。

引き続き、井村元総長の発声により乾杯し、あちらこちらに歓談の輪が広がった。



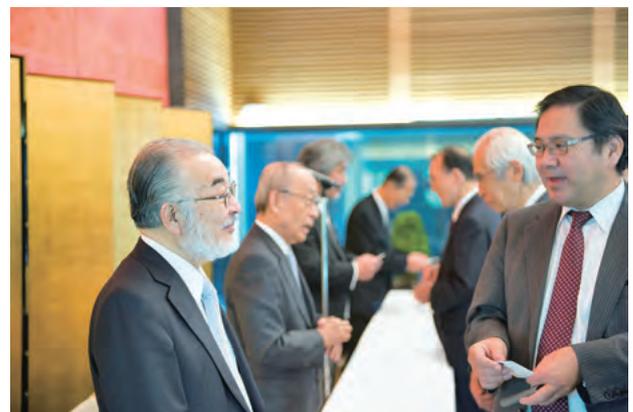
新年の挨拶をする山極総長



乾杯の発声をする井村元総長



長尾元総長と稲葉カヨ 理事・副学長



尾池元総長と寶馨 防災研究所長

(総務部(総務課))

部局の動き

寄附講座，寄附研究部門の設置，更新，延長

平成27年5月1日にこころの未来研究センターに寄附研究部門が新設され，薬学研究科の寄附講座が更新された。また，12月1日に医学研究科に寄附講座が新設された。平成28年4月1日付で農学研究科の寄附講座が延長，農学研究科および経営管理研究部の寄附講座が更新，医学研究科の寄附講座の寄附金額に変更があった。概要は以下の通りである。

こころの豊かさ研究部門(新設)	
1. 部局名	こころの未来研究センター
2. 名称 (英名)	こころの豊かさ研究部門 (Kokoro Well-Being Studies)
3. 寄附者	日本たばこ産業株式会社
4. 寄附金額	総額 1億5百万円
5. 設置期間	平成27年5月1日～平成30年4月30日(3年間)
6. 担当教員	寄附研究部門教員(特定准教授) 内田由紀子(平成28年4月1日 就任予定) 寄附研究部門教員(特定助教) 柳澤邦昭
7. 研究目的	こころ豊かな社会・こころ豊かな生活の成立基盤の必要十分条件を明らかにすることを目的として，人文学的手法，社会科学的手法，神経科学的手法，フィールド科学的手法など多様なアプローチでこころの豊かさについての研究を実施する。
8. 研究内容	こころの特性を捉えるうえで，進化的時間(人類学，霊長類学等)，歴史的時間(宗教学，社会学，思想哲学等)およびライフステージ(心理学，認知科学，脳科学等)という3つの時間単位および人，社会，環境の間の相互作用を軸に，以下「研究課題」に記載の研究を実施するとともに，新しい研究課題にも積極的に取り組む。
9. 研究課題	<ul style="list-style-type: none"> ・『期待感』とこころの豊かさの脳科学的研究 ・こころの豊かさの文化・歴史的比較研究 ・つながり・共生のメカニズムとこころの豊かさの研究 ・物質的豊かさとこころの豊かさの研究

ナノバイオ医薬創成科学講座(更新)	
1. 部局名	薬学研究科
2. 名称 (英名)	ナノバイオ医薬創成科学講座 (Department of Nanobio Drug Discovery)
3. 寄附者	東レ株式会社
4. 寄附金額	総額 9千万円
5. 設置期間	平成27年5月1日～平成30年4月30日(3年間)(平成19年設置講座の延長)
6. 担当教員	寄附講座客員教授 清水一治 寄附講座客員教授 嶋田 裕 寄附講座客員教授 須藤哲央 特定講師 武井義則
7. 研究目的	臨床との連携を基盤に，最先端ナノバイオテクノロジーを活用して生体機能ならびにがんの病態の本質解明を目指し，新たな診断，医療，医薬の創成を図る。

8. 研究内容	食道がんに関し、培養細胞(嶋田客員教授作成)や、臨床検体について、miRNAマイクロアレイ解析により、従来は得られなかった新たなターゲット(受容体)を見出した。このターゲットを中心として新たな分子標的医薬の創成を目指している。
9. 研究課題	・miRNA発現解析と医薬ターゲット探索 ・新規標的に対する抗体の探索

代謝制御学講座(新設)

1. 部局名	医学研究科
2. 名称 (英名)	代謝制御学講座 (Department of Metabolic Medicine)
3. 寄附者	MSD株式会社, 小野薬品工業株式会社, 田辺三菱製薬株式会社
4. 寄附金額	総額 9千万円
5. 設置期間	平成27年12月1日～平成30年11月30日(3年間)
6. 担当教員	・寄附講座教員(特定准教授) 曾根正勝 ・寄附講座教員(特定助教) 田浦大輔
7. 研究目的	身体における代謝ネットワークを制御することにより臓器障害を軽減し、健康寿命の延伸をはかる。
8. 研究内容	代謝内分泌疾患と、それら疾患によってもたらされる血管や臓器の障害において、全身の代謝ネットワークと各臓器の代謝シグナルの解析を通じてその病態を明らかにし、それら代謝を制御する手法の研究開発を行う。また、それら代謝障害によりもたらされた臓器障害を修復・再生する手法の研究開発も行う。
9. 研究課題	・生体内の臓器機能と代謝制御における各種生理活性物質の意義の解析 ・各種ホルモン産生異常の病態、合併症、診断と治療に関する基礎・臨床研究 ・代謝障害によってもたらされる血管障害の病態解明と治療法の開発 ・代謝内分泌臓器の再生医療の開発

食と農の安全・倫理論講座(延長)

1. 部局名	農学研究科
2. 名称 (英名)	食と農の安全・倫理論講座 (Food and Agriculture Ethics and Safety)
3. 寄附者	株式会社本田味噌本店, 株式会社銀閣寺大西, ヤマサ蒲鉾株式会社, エスフーズ株式会社, 全国農業協同組合中央会, 故永井幸喜, 株式会社モリタ屋, ヒガシマル醤油株式会社, 鹿児島県経済農業協同組合連合会, エスケー食品株式会社, 株式会社ロック・フィールド, 株式会社明石菊水
4. 寄附金額	総額 3千4百万円(今回1百万円を追加受け入れ)
5. 設置期間	平成25年4月1日～平成28年3月31日(平成28年1月31日までとしていた設置期間を2か月延長)
6. 担当教員	寄附講座教員(准教授相当) 工藤春代 寄附講座教員(助教相当) 鬼頭弥生
7. 研究目的	世界的な問題となっている食品安全や環境問題の解決に必要なとされながら、まだ未確立・未着手である科学ベースのリスク管理、倫理、ステークホルダー間のコミュニケーション研究を関連分野と協力して進め、その学的基礎を固めるとともに実践的な手法の確立を目指し、若手人材を育成する。また、その成果により農学部/研究科全体のガバナンス教育に寄与する。

8. 研究内容	関連分野と共同して実施するプロジェクト研究において、科学的基礎による食の安全や環境問題の解決のためのリスク管理システム、先端科学技術を含んで拡大した農学研究を支える農学倫理、技術者倫理、農業・食品産業倫理の探求と確立、それらの基礎となる消費者・事業者行動分析、および農学、食学(フードサイエンス)や農・食に関する研究者や市民、事業者、行政をはじめとする関係者の意思疎通・相互理解のための基礎研究と手法の確立を進める。
9. 研究課題	<ul style="list-style-type: none"> ・食品由来のリスクの管理システムに関する研究 ・農学倫理、農業・食品産業倫理、技術者倫理の確立のための研究 ・消費者行動分析、リスクコミュニケーション、フードコミュニケーション、サイエンスコミュニケーションの考え方と手法に関する研究

産業微生物学講座(更新)

1. 部局名	農学研究科
2. 名称 (英名)	産業微生物学講座 (Industrial Microbiology)
3. 寄附者	微生物産業関連企業
4. 寄附金額	総額 1千5百万円
5. 設置期間	平成28年4月1日～平成30年3月31日(2年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(客員教授) 高橋里美 寄附講座教員(特定助教) 日比 慎 寄附講座教員(特定准教授または特定助教): 1名
7. 研究目的	日本の産業の中でも長い伝統と高い技術力を有する応用微生物学領域の研究をさらに推進し、その基盤的技術の確立を目指すとともに、関連する学術・産業界で活躍できる人材の育成を行う。特に、微生物機能を生かした生産技術の将来のシーズとなるいくつかのテーマについて基礎・応用の両面から研究する。
8. 研究内容	微生物機能を生かした物質生産技術のシーズとなるいくつかのテーマに関して、自然界からの探索(スクリーニング)・酵素機能の解明・遺伝子の解析・反応および生産条件の設定等の検討を行い、生産プロセスの構築を行っていく。これらの技術開発の過程を通じて、大学院教育の場における基礎知識および実験技術の取得だけでなく、研究開発能力を持つ人材の育成が期待できる。
9. 研究課題	<ul style="list-style-type: none"> ・医薬品等の合成に有用な精密化学品製造技術の開発 ・機能性食品素材として有望な新規油脂の微生物生産 ・環境汚染物質の微生物分解と物質生産への応用 ・バイオマス原料からの化成品ならびに燃料生産 ・植物生育促進に有効な微生物機能の開発 ・複合微生物系機能開発

ファイナンス(お金のデザイン)講座(更新)

1. 部局名	経営管理研究部
2. 名称 (英名)	ファイナンス(お金のデザイン)講座 (Finance (Money Design) Chair)
3. 寄附者	株式会社お金のデザイン
4. 寄附金額	総額 6千万円
5. 設置期間	平成28年4月1日～平成31年3月31日(3年間)

6. 担当教員	寄附講座教員(特定教授) 加藤康之 寄附講座教員(客員教授) 1名 寄附講座教員(研究員) 1名
7. 研究目的	資産運用業務の先端的手法を研究し日本経済の収益性向上に貢献することを目的として設置する。日本では成熟化が進み経済成長が低迷している。一方、日本は世界第2位の個人金融資産を有しておりその有効な活用が喫緊の課題であり、資産運用業の重要性が一段と増している。そのため、ファイナンス理論の観点から先端的手法を研究し、日本の資産運用業の国際競争力を高めるために貢献する。
8. 研究内容	具体的な資産運用業における実態の考察を行ない、より先端的で、実用的な手法を分析、開発していく。
9. 研究課題	新しい潮流であるETFポートフォリオの運用手法や人工知能の活用である。新しい運用商品であるETFは資産運用において注目されているが、そのリスク管理手法などはまだ研究が十分に行われていない分野である。また、投資アドバイスへの人工知能の活用は世界的にも導入が始まったばかりの分野であり、将来資産運用に革命をもたらすと期待されている。これらの主要テーマについて研究開発を行う。

臨床腫瘍薬理学・緩和医療学講座(変更)

1. 部局名	医学研究科
2. 名称 (英名)	臨床腫瘍薬理学・緩和医療学講座(平成27年4月1日名称変更(旧 臨床腫瘍薬理学講座)) (Department of Clinical Oncology, Pharmacogenomics, and Palliative Medicine)
3. 寄附者	株式会社ヤクルト本社, 昭和薬品化工株式会社, 協和発酵キリン株式会社, 塩野義製薬株式会社, 中外製薬株式会社, テルモ株式会社, 日本ケミファ株式会社 (平成27年4月1日寄附者追加)
4. 寄附金額	総額 1億1千9百万円(今回2千9百万円を追加受入れ)
5. 設置期間	平成26年4月1日～平成29年3月31日(3年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(特定准教授) 谷向 仁 寄附講座教員(特定准教授) 金井雅史 寄附講座教員(特定助教) 森由希子
7. 研究目的	臨床腫瘍学領域の薬物療法の効果や副作用に関して、ゲノム薬理学的観点から個別化医療の確立・普及を目標とし、最終的にがん治療の進歩に資することを目的とする。 緩和医療学領域では、がんやその他の治療困難な疾患をもつ患者の全経過における全人的苦悩(total suffering)から解放とquality of lifeの向上を目指す緩和医療を発展させるために、国際的かつ学術的研究を促進し、その実践と教育を図り、医療・福祉の発展に寄与することを目的とする。
8. 研究内容	癌薬物療法の進歩のための①病態関連の遺伝子についての研究, ②遺伝子多型と薬剤に対する反応性の研究, ③遺伝子検査による薬剤反応性を予測する研究など, PGxを用いた個別化治療を推進し, 癌薬物療法を安全かつ有効に投与する方法論を確立する。 緩和医療の進歩のため, ①大学附属病院における緩和医療の拡充, ②医学部における緩和医療学の卒前・卒後教育の確立・実践, ③緩和医療領域における臨床研究, ④最新の緩和医療の情報発信, ⑤地域における緩和医療の提供体制の整備など, 緩和医療の臨床, 教育, 研究の基盤を確立する。
9. 研究課題	1. オキサリプラチンに関するゲノム薬理学研究 2. イリノテカンに関するゲノム薬理学研究 3. 臨床腫瘍学におけるゲノム薬理学研究の拠点形成のための基盤整備と多癌腫に対する網羅的解析システムの構築 4. 緩和医療領域における臨床研究 5. 最新の緩和医療の情報発信 6. 地域における緩和医療の提供体制の整備

寸言

京都の星空を眺めて

河北 秀世

私は現在、京都産業大学・神山(こうやま)天文台の天文台長として、天文学・惑星科学の研究を専門として教育・研究の職についています。しかし、私が京都大学に在籍していた頃には、まさか自分がこのような立場になろうとは、夢にも思っていませんでした。せつかくの機会です。

私は現在、京都産業大学・神山(こうやま)天文台の天文台長として、天文学・惑星科学の研究を専門として教育・研究の職についています。しかし、私が京都大学に在籍していた頃には、まさか自分がこのような立場になろうとは、夢にも思っていませんでした。せつかくの機会です。

私が京都大学に在籍したのは平成2年から平成5年までの4年間です。私は当時、大阪にありました大阪府立工業高等専門学校を卒業し、京都大学工学部情報工学科に編入いたしました。その後、工学部情報工学科を卒業し、大学院工学研究科情報工学専攻を修了するまでの4年間が私にとっての京都大学在学期間というわけです。私が編入したころ、京都大学は全国の工業高等専門学校卒業生の編入を受入れるようになって2年目で、受入れ側もどのような対応をして良いか試行錯誤という雰囲気でした。特に大学入学後の2年間で学ぶ一般教養科目と語学をスキップして3回生から編入するわけですから、カリキュラムの連続性も何もあったものではなく、当時の学科の諸先生には、ご苦労をおかけしたと思います。特に卒業論文ならびに修士論文の指導をしていただいた上林彌彦教授には、研究者のあり方というもの、身をもって示していただいたと思います。上林先生は若くして亡くなられてしまいましたが、この場を借りて、改めて感謝の意を表します。

私が京都大学在籍中に最も時間を割いたのは、しかし、学業よりもサークル活動で、「京都大学天文同好会」という天文サークルに在籍していました。特に木星(縞模様があることで有名ですが、これは木星の雲の模様です)のスケッチ観測に熱中し、木星が夜空に見える間はひたすらスケッチを取りつづける毎日でした。天文同好会のBOX(いわゆる部室)は西部講内にあつて街灯もほとんど無く、口径15センチの望遠鏡を持ち出してはスケッチをし



ておりました。木星の自転周期は10時間ほどで、一晩の間に様々な面を見せてくれますから、一晩の間に何度もスケッチをとって木星の雲の変化を追いました。平成の初めと言えば、まだバブルの名残があつて、ずいぶんと京都の夜空が明るかったことを覚えています。最近になって京都の夜空を見ていて思うのは、やっぱり空が暗くなったなあということですね。

私は学生時代、研究としてはコンピュータ・ソフトウェア(特に、今で言うカーナビの基礎研究)を専門としており、天文はまったくの趣味でした。大学院修了後にはシャープ株式会社就職し、Windows95を搭載したノートパソコンの開発などをやっていたほどです。しかし、就職後に縁あつて岡山県にある公開型の天文台(美星天文台)に足しげくお邪魔するようになり、美星天文台にある口径1mの望遠鏡を用いて彗星(ほうき星)の観測を行つて論文を出版するなど、アマチュア天文家として研究を始めました。もともと観測データをコンピュータで解析したり計算のためのプログラムを作つたりする事は得意でしたから、大学の授業で学んだ知識と大学のサークルでの趣味が一致して、「平日は会社で週末は天文台」という生活を5年ほど送りました。その間、サークルの友人たち(おもに、理学部に在籍していた友人たち)から学生時代のノートのコピーや教科書を貰い受け、学部生になつたつもりで天文学や関連分野の勉強をしていました。サークル時代の人脈にはずいぶんと助けられたと思います。その後、群馬県の県立天文台に転職し、更に10年ほど前に京都産業大学に職を得たというわけです。選んだ研究対象が彗星(ほうき星)という珍しいテーマであつたためか、国内外から研究成果を評価され、現在では天文台長という重要な立場を任せていただいています。大学時代のいろんな出会いがなければ、このような人生は送っていないと思います。今、京都大学に在籍している学生たちにも、出会いを大切に、ありきたりの道を辿らず大胆に一步を踏み出して人生を歩んでほしいと思います。

(かわきた ひでよ 京都産業大学理学部教授／神山天文台長、平成4年工学部卒業、平成6年工学研究科修了)

随想

クレイク先生のこと

名誉教授 中務 哲郎

ラグビー・ワールドカップ2015がベストフォーに絞りこまれるまでに、二つの歴史的瞬間を目のあたりにした。一つは言うまでもなく、優勝候補の一角南アフリカを相手に、ロスタイムに逆転勝利した日本の快挙。高校1年の時、専ら超高校級と言われた3年生たちの力によるとはいえ、全国大会に出場してベストエイトまで残った者としては、この試合の最後の5分は袖を絞りながらの観戦となった。もう一つは、ラスト2分で審判の誤審とされるものによりオーストラリアに敗れたスコットランドの戦いである。

私が初めて海外に出たのは48歳の時、所はスコットランドであったが、4ヵ月半の滞在には大きな目的があった。それは古典学の本場から教授を本学にお迎えすることであった。セント・アンドルーズはゴルフの聖地として知られているが、その大学は英国で3番目に古く、1995年当時は、20世紀最大の古典学者の一人、ケネス・ドーヴァー先生がレクターの地位にあった。

エリザベス・メアリ・クレイク先生はドーヴァー先生の高弟で、何人かの日本人留学生を指導しているので話が切り出しやすかったが、私は夏目漱石の小品「クレイグ先生」を示しながら、クレイグ先生が漱石を通じて日本の近代化に貢献して下さいように、クレイク先生は古典学で日本の学生を導いて下さいませんか、とお願いしたのである。

着任後の先生は本務校での授業は固より、全国の大学から請われて講演に応じる他に、豊富な人脈を利用して数々の著名な学者を招き、更には日本西洋古典学会の欧文誌発刊にも尽力下さった。先生の日本の美を愛することは尋常の日本人を遙かに超えて、探勝の旅は北海道から九州に及び、内山勝利さんの手引きで新門前町、東寺、北野天満宮の骨董市に通い、買った古美術は数えきれぬ中に、最も大きな買



い物は5尺に余る石灯籠であった。

幸いにして夫君アレックスさんが数理解析研究所の客員教授として来日したため、クレイク先生の京都滞在は寂しいものではなかったと思われる。しかし、文学部在任4年が過ぎたところでアレックスさんが帰国することになり、先生も帰りたいと言い出した。5年勤めてここで定年を迎えて下さいませんか、と私がお願いすると、先生は、「分かった、テツオが羽織袴で教授会に出て来るなら、もう1年おりましたよ」と条件を出された。

先生はエウリピデス初めギリシア悲劇の研究で知られるが、西洋医学の祖ヒポクラテスの研究でも世界をリードしている。『ヒポクラテス集成』には約70篇の論文が含まれるが、先生は集中の短い1篇を修士論文にするよう学生を指導した。学生は期待に応え英語の論文を提出する。「論文は全体として概説の域を出ないが、中に一点面白い指摘がある。学生のアイデア、私が学説史と英語を書き、二人でshorter noteとして英国の雑誌に発表しないか」と誘った。学生は論文全体を単独で外国雑誌に投稿するとてこれを断る。「それはヒュブリスである。It's finished」との先生の言葉で終わりとなるべきところ、折角の先生の好意であるから承けたらどうか、と助教がメールを送る。研究室ぐるみで自分の論文を盗もうとしていると考えた学生は文学部窓口で、クレイク教授がギリシアで私の論文を発表するからストップさせて欲しい、と訴え出た。先生がギリシアへ行かずスコットランドに帰国することは、渡航計画を見れば自明であるのに、文学部は確認を怠り訴えを容れた。これもまた、スコットランド人に対する世紀のミスジャッジであった。

クレイク夫妻は2014年7月、金婚式を祝われた。広い芝生の庭に設営されたマルキーで宴は7時間に及び、楽団による演奏と踊りが絶えなかった。その入口に近く立つ石灯籠は、幾冬の霜雪を耐えてすっかり風土に溶けこんでいた。先生の名著The Hippocratic Corpusが届いたのはその秋であった。

(なかつかさ てつお 平成22年退職 元文学研究科教授、専門は西洋古典学)

洛書

心境の変化

大澤 志津江

京都大学に異動して、約3年もの月日が早くも流れた。京都大学には、父親が大学生として在籍していたのだが、当時は京都市電が路面を走っていた頃で、その風景は今とは全く違う。



京都大学への異動前後での、私にとっての最も大きな変化は、教員として研究に携わるようになったことである。私は、「生物の組織や器官を形作る仕組み」、なかでも特に、細胞社会において、細胞同士が互いに相互作用しながら、特定の形を作り上げていく仕組みに興味を持って研究を進めている。学生の頃からポストクの頃までは、研究室での大部分の時間を実験に費やしていた。手を動かしながら考えるタイプの私にとっては、自分で実験をすることが重要であり、また、顕微鏡を通して出会った、思いもしなかった現象に心を躍らせ、妄想(?)を膨らませるのが好きだった。それが、京都大学に異動し、講師に着任してからというもの、学生に研究を指導する生活が始まった。一番の戸惑いは、自分で主体的には実験をしないプロジェクトに関して、研究の道筋を立てるのをサポートすることにあった。実験／解析しているときに感じる手応えや臨場感は、自ら手を動かして初めて得られるものであり、出来る限りそれらを感じながら学生と議論を進めるにはどうすべきか、その方法を模索する日々が続いている。また同時に学生は、PIを目指している人、実験が好きで研究をしている人、企業への就職を考えている人、と多様であり、その多様性に応じて指導する難しさを感じることもある。しかしながら一方で、学生の成長を体感できる醍醐味があることにも気づかされた。学生が研究室に入室したての頃は、何を、どのように実験をするのか、具体的なことを全て詳細に説明する必要があったのが、次第に学生が自分でも考えられるようになる、

なかには、自ら研究の方向性を立案できるようになる、それにより、議論が深まり、プロジェクトが発展していく…このような正の循環を作っていくことが教員の1つの役目であると現在では感じるようになった。共同で研究を発展させていくという、研究の新たな面白さが分かってきたようにも思う。

あと一つ、京都大学に異動してからの変化は、体力作りのためにテニスを始めたことである。始めてみて最も驚いたのは、テニスをしている間は、研究や気の重い仕事が頭から離れることである。そのような、いわば頭が一旦リセットされた後に、新しいアイデアが浮かぶことが多く、テニスを終えて、ひっそりと静まり返った夜道を歩いて帰るひとときが貴重な時間となっている。また、テニスを始めたことで、研究以外の仕事をしている人達と知り合う機会に恵まれた。「何の研究をしているのですか？」この何気ない問いに対して答えを窮した自分に、未熟さを感じるとともに、今なお、答えを模索し続けている。基礎生物学のなかでも、たとえば「がんの発生・進行メカニズム」や「神経変性疾患」等、ヒトの病気に関わる研究を行っていれば、簡潔に分かりやすく表現できるように思う。しかしながら、社会のニーズにダイレクトに応えられる、いわゆる「役に立つ」ものとして直感的に捉えにくいような対象を研究している場合は難しい。一步間違えると、趣味に生きている、変わった人である。それはそれで良いのかもしれないが、面白そうなことを、楽しくやっている、そして将来的には役に立ち得る、ということ伝えられたら、と思う。またそれは、同世代や年配の方達にだけでなく、これから将来の道を定めるような次世代に対しても、同様である。「生物の組織や器官を形作る仕組みの解明」という、学生の頃からの目標に進んでいくにあたり、自ら手を動かして取り組むだけでなく、後進を育て、また、広く伝えることを意識する、その中で、研究の新たな側面と出会いながら成長していきたいと思う今日この頃である。

(おおさわ しづえ 生命科学研究所准教授、専門は発生生物学)

栄誉

諸熊奎治 福井謙一記念研究センター FIFC リサーチフェローが日本学士院会員に選ばれる

このたび、諸熊奎治 福井謙一記念研究センター FIFCリサーチフェローが日本学士院会員に選ばれた。以下に同氏の略歴、業績等を紹介する。

諸熊奎治 先生(福井謙一記念研究センター FIFCリサーチフェロー)は、昭和32年京都大学工学部工業化学科卒業、同37年同大学院工学研究科博士課程単位修得退学、ただちに同工学部助手に採用され、ノーベル化学賞受賞者福井謙一先生の研究室においてその薫陶を受けられた。その後、同38年京都大学工学博士を授与され、同39年米国コロンビア大学客員助教授、博士研究員、同41年米国ハーバード大学博士研究員、同42年米国ロチェスター大学助教授、同44年同大学准教授、同46年同大学教授を歴任され、同51年分子科学研究所教授、同63年総合研究大学院大学教授兼任、平成5年米国エモリー大学ウィリアムヘンリーエマーソン教授、同18年京都大学福井謙一記念研究センターリサーチリーダー、同27年同センターFIFCリサーチフェローなどを経て現在に至る。この間、国際量子分子科学アカデミーの会長を2期6年勤められた。平成20年には恩賜賞・日本学士院賞を受賞され、同24年文化功労者に選ばれた。

先生は、分子の構造・機能・反応を設計するための理論化学・計算化学を構築し、世界に冠たる成果



をあげてこられた。巨大分子系をいくつかの空間領域にわけ、機能の本質を担う重要な領域には精度の高い方法を、重要性が低い領域には簡便な方法を組み合わせるオニオム法を開発された。この方法は平成25年ノーベル化学賞発表の際に、ノーベル財団より、ノーベル化学賞に次ぐ重要な業績の一つとして紹介された。また、多数の分子を結び付ける分子間相互作用の起源と本質や役割を解明するためのエネルギー分割法を開発し、発展させて来られた。さらに、物質の変換をつかさどる化学反応の理論的研究においても、反応機構と経路の詳細な解明、反応経路自動探索法の開発、触媒反応や生体化学反応の理論的研究などに、先導的な役割を果たされ、さらに電子論と分子動力学理論をあわせた理論計算法に基づいて、フラレン、ナノチューブやグラフェンなどの炭素ナノ構造体の生成機構を提唱された。先生の研究は当該分野に止まらず化学および周辺分野に広く波及効果を及ぼし、それらの分子論的理解の深化と一層の進歩に貢献してこられた。

今回の日本学士院会員への選出は、これまでの先生の幅広い、国際的な業績が高く評価されたものであり、大変喜ばしい。

(福井謙一記念研究センター)

竹内繁樹 工学研究科教授および神谷之康 情報学研究科教授が大阪科学賞を受賞

このたび、竹内繁樹 工学研究科教授および神谷之康 情報学研究科教授が大阪科学賞を受賞した。以下に両氏の略歴、業績等を紹介する。

竹内繁樹 教授は、平成3年3月京都大学理学部を卒業、同5年3月同大学院理学研究科修士課程修了後、三菱電機株式会社先端技術総合研究所研究員を経て、同11年10月北海道大学電子科学研究所講師に採用、また平成12年7月に京都大学博士(理学)の学位を取得し、



同年9月に北海道大学電子科学研究所助教授、同19年6月同大学電子科学研究所教授、同26年3月京都大学工学研究科教授となり現在に至る。

この間、平成17年に科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞、同18年に応用物理学会光学論文賞、同22年に日本学術振興会賞とDaiwa Adrian Prize 2010を受賞されている。

今回の受賞の対象となったのは「光子を用いた量

子情報通信処理・量子計測の先駆的研究」である。量子の「重ね合わせ状態」を直接用いることで、超並列処理を実現する「量子コンピュータ」が、飛躍的な計算能力を持つことが平成4年に示された。しかし、当時量子コンピュータはきわめて数学的な概念に留まり、どのように物理系で実現できるのかは明らかではなかった。竹内教授は、制御性がよく、かつ長距離伝送が可能である「光子」を用いて、量子計算のアルゴリズムを実行する回路を考案、平成10年に世界にさきがけて実験に成功した。

同教授はその後、複数の光子を用いた光量子回路実現へと研究を展開、その基本素子である、光子間スイッチを提案、平成17年に実現した。さらにその研究を発展させ、当時世界最大規模の光量子回路「量子もつれ合いフィルター」の実現に平成21年に成功した。その後も様々な光量子回路の実現に成功している。

神谷之康 教授は、平成5年東京大学教養学部を卒業、同7年同大学院理学系研究科修士課程科学史・科学基礎論専門課程を修了後、同13年アメリカ合衆国カリフォルニア工科大学生物学部計算神経システム・プログラム博士課程を修了している。同13年～15年にハーバード・メディカルスクール・ベスイスラエル・ディーコネスメディカルセンター、同15年～16年にプリンストン大学心理学部で勤務した後、株式会社国際電気通信基礎技術研究所(ATR)に入所した。同20年より同研究所・神経情報学研究室・室長となり、奈良先端科学技術大学院大学・客員教授を兼任した。同27年4月からは、本学大学院情報学研究科教授となり、現在に至る。

同20年に朝日21関西スクエア賞、同25年に塚原仲晃記念賞、同26年に日本学術振興会賞を受賞されている。

このたびの受賞は、「脳情報デコーディング法の開発と夢の解読」による業績が評価されたものである。

脳情報デコーディングとは、課題や刺激を与えたときの脳活動部位を同定する従来の解析手法と異なり、脳活動信号から心理状態を予測するアプローチ



さらに同教授は、光子の量子もつれ状態を計測に応用する研究を開拓した。従来光計測の感度限界は、従来ショット雑音により決まると考えられてきた。しかし、個々の光子を制御した量子もつれ光により、この限界を超える事ができる。同教授は、四つのもつれ合い光子を用いた干渉実験による、標準量子限界をうち破る位相測定感度の実現に平成19年に成功、さらに平成25年には、量子もつれ光を光源とする微分干渉顕微鏡「量子もつれ顕微鏡」を世界で初めて提案・実現、古典光より高い感度を実証した。他に、高効率でかつ光子数識別可能な光子検出システムの開発や、テーパ光ファイバを用いた高効率単一光子源の実現などの成果も得ている。

本賞は、光子を用いた量子情報科学の研究を世界的に先導するこれらの業績に対して授与されたものであり、今後ますますの活躍が期待される。

(大学院工学研究科)

を指す。神谷教授のグループは、ヒトの脳信号を利用した「脳情報デコーディング法」を考案し、脳内情報を解読する新しい手法を開発してきた。同グループは、機能的磁気共鳴画像(fMRI)信号を機械学習アルゴリズムを用いて解析することで、脳画像の画素より微細な脳構造に表現されている視覚情報を脳画像信号から解読することに成功した。またこの手法を拡張して、見ている画像を脳活動信号から画像として再構成すること(視覚像再構成)や、脳画像から解読できる情報量を飛躍的に向上させ、睡眠中の脳活動を解析することで、夢に現れる物体を高い精度で解読することに成功した。夢は、本人にしかその内容を知ることができない主観的な現象であるため、科学的な研究対象にすることは難しいと考えられてきた。この研究は、夢の内容が脳の物理的な活動パターンと対応することを初めて実証したものである。脳情報デコーディング法は脳機能研究に革新をもたらし、夢だけでなく、想像・幻覚などを解読するために用いることもでき、ブレイン・マシン・インターフェース、心理状態の可視化、精神疾患の診断など広い分野からの注目を集めている。神谷教授の今後ますますの活躍が期待される。

(大学院情報学研究科)

平成27年度医学教育等関係業務功労者の表彰

文部科学省は、医学または歯学に関する教育・研究もしくは患者診療等の業務に関し、顕著な功労のあった方々を対象に毎年表彰を行っている。平成27年度医学教育等関係業務功労者の表彰式が12月2日(水)に行われ、大森勝之 医学部附属病院検査部臨床検査技師、上田真也 医学部附属病院手術部医療機器操作員が文部科学大臣表彰を受けられた。

大森勝之 臨床検査技師は38年余の長期にわたり診療支援や臨床検査の発展に積極的に力を注ぎ、また、職員や学生の教育にも大きく貢献してこられた。



特に、検査部遺伝子細胞検査においては、フローサイトメーターを使用した細胞分析の診断支援および医師や臨床検査技師への教育的指導もこなってこられた。

医学部附属病院に限らず、地域医療へも貢献し、院外施設からも信頼される逸材であり、この分野の検査や教育に多大な貢献をされ、臨床検査の発展に寄与された。

上田真也 医療機器操作員は、38年にわたり手術部において手術台、患者体位固定具、无影灯、手術用顕微鏡等の手術関連機器の保守点検と整備、手術室の空調管理、洗浄・滅菌装置の管理に従事され、高度な手術の安全かつ円滑な施行に対して、多大な貢献をされてきた。特に、独自の体位固定具を考案・実用化され、手術を受ける患者さんの体位変換と体位固定具装着における功績は顕著である。



(医学部附属病院)

話題

島尻内閣府特命担当大臣(科学技術政策担当)が医学部附属病院および桂キャンパスを視察

11月30日(月)、島尻安伊子 内閣府特命担当大臣(科学技術政策担当)が医学部附属病院先端医療機器開発・臨床研究センターおよび桂キャンパスを視察された。

医学部附属病院では湊 長博 研究・企画・病院担当理事・副学長、松田秀一 医学部附属病院副病院長(研究担当)の出迎えを受けた後、先端医療機器



光超音波マンモグラフィ装置の臨床画像の説明を受ける島尻大臣(医学部附属病院)



研究室で説明を聞く島尻大臣(桂キャンパス)

開発・臨床研究センターで実施されている内閣府の革新的研究開発推進プログラム(ImPACT)のひとつ「イノベーティブな可視化技術による新成長産業の創出」に関して、八木隆行 プログラム・マネージャーから概要説明を受けた。その後、実際に研究室を訪れ、本学とキヤノン株式会社で共同開発中の光超音波マンモグラフィ装置の見学を行った。戸井雅和 乳腺外科長からは臨床画像の説明も受け、島尻大臣は装置の早期実現に期待を寄せていた。

次に桂キャンパスを訪問され、船井哲良記念講堂

前にて伊藤紳三郎 工学研究科長等の出迎えを受けた。まず同講堂内の本学関係ノーベル賞受賞者の業績展示コーナーを見学され、大臣は受賞者達の若き日の研究ノートに興味深く見入っていた。続いてBクラスター桂ラウンジにて伊藤研究科長の挨拶の後、国立研究開発法人科学技術振興機構の運営の下で現在桂キャンパスで研究が進められている、内閣府「総合科学技術・イノベーション会議(CSTI)」が選定した戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)の重

点課題の一つである「エネルギーキャリア」について村木 茂 プログラムディレクターより、「エネルギーキャリア」プログラムにおける研究開発テーマ「アンモニア燃料電池」について江口浩一 工学研究科教授より説明が行われた。その後、船井交流センターに移動し「アンモニア燃料電池」の研究現場を視察され、大臣は江口教授の解説に興味深く聞き入り、研究内容について熱心に質問されていた。

(医学部附属病院、大学院工学研究科)

JSPS「リスク評価に基づくアジア型統合的流域管理のための研究教育拠点」第5回包括シンポジウムを開催

工学研究科を日本側拠点機関、マラヤ大学をマレーシア側拠点機関として実施している日本学術振興会アジア研究教育拠点事業の一環として、11月19日(木)から21日(土)にかけて、第5回包括シンポジウムを京都大学桂キャンパス(ローム記念館)にて開催した。このシンポジウムは本事業最後のシンポジウムであり、日本からは51人、マレーシアからは46人、計97人の出席があった。

1日目午前中のオープニングセッションでは、伊藤紳三郎 工学研究科長より、今後も本学とマラヤ大学の関係性を継続していくことを願う旨、歓迎の挨拶があった。



記念品交換をするZaini政務次官と伊藤研究科長

続いてZaini Bin Ujang マレーシア高等教育省政務次官、日本側コーディネーターの清水芳久 工学研究科教授、マレーシア側コーディネーターのNik Meriam binti Nik Sulaiman マラヤ大学教授からの講演が行われた。その後、メンバーそれぞれが所属するグループに分かれてのグループディスカッシ

ョンの時間が設けられた。午後からはポスターセッション65件の発表を挟み、各グループリーダーから5年間の研究成果の総まとめが発表された。最後に嘉田由紀子 前滋賀県知事・現びわこ成蹊スポーツ大学長による講演が行われ、参加者が琵琶湖への理解を深める良い機会となった。



嘉田学長(中央)を囲む参加者

2日目のオープニングでは、Zaini政務次官による特別講演が行われた。続いて両コーディネーターによる5年間の事業総括が行われ、一同は、本事業終了後も共同研究を継続していくことを確認した。クロージングセッションではポスター優秀賞の授与が行われ、シンポジウムは盛況のうちに終了した。

3日目は、マレーシアからの参加者を対象に琵琶湖の沖島にある浄化センターの見学を行った。一同は沖島住民の琵琶湖水質管理に関する取り組みや生活文化について情報収集を行い、貴重な時間を過ごした。

(大学院工学研究科)

宇治キャンパスで総合防災訓練を実施

宇治キャンパスでは11月25日(水)に、宇治市東消防署の協力のもとに、宇治市で震度6弱の地震(南

海トラフ地震)が発生したことを想定した、総合防災訓練が行われた。

これは京都大学危機管理計画(地震編)に対応する訓練に、地震時の安否確認・情報伝達の要素を加え、負傷者や火災の発生等、現実的な想定のもと、組織的な避難誘導・情報伝達を総合的にシミュレーションするものとなっている。教職員で組織する自衛消防地区隊を中心に、その他の教職員、学生などキャンパス全体で総勢1,000名以上が参加し、初期消火や安否情報伝達、避難誘導、負傷者の救護、また避難状況の集計等、様々な場面が設定され、参加者は、各自の役割を確認しながら実践した。



消火器操作訓練

避難完了後は、宇治市東消防署の指導による消火器操作訓練も行い、参加者は熱心に説明を聞き、実際に消火器を手にとって体験した。

また、宇治市東消防署による煙中体験訓練も行われ、参加者は煙の中での避難行動の難しさを体験した。

訓練終了後には、宇治地区世話部局長の寶 馨 防災研究所長の挨拶、宇治市東消防署からの講評の後、消防署の方と自衛消防地区隊を中心とした参加者との意見交換も行われ、盛況のうちに終了した。



煙中体験訓練

(宇治地区事務部)

環境学分野における教育・研究・ビジネスの国際協働に関わる国際シンポジウムと、環境学分野における教育・研究・ビジネスの国際協働実践のための国際ワークショップを開催

地球環境学堂は、環境学分野における教育・研究・ビジネスの国際協働に関わる国際シンポジウムと、環境学分野における教育・研究・ビジネスの国際協働実践のための国際ワークショップを本学にて開催した。

12月11日(金)に行われたシンポジウムは、16カ国25大学や7社の民間企業をはじめとする産官学の分野から総勢152人の参加者を得た。藤井滋穂 地球環境学堂長の開会の辞に続いてNGO BUNTHAN カンボジア王立大学長、John Sodeau アイルランド・コーク大学教授、石原賢一 JETRO京都貿易情報センター所長の挨拶の後、稲葉カヨ 国際担当理事・副学長が主催校挨拶を行った。メインセッションでは、本学の教育・研究・ビジネス連携取組みについて、農学研究科の国際連携、工学研究科の国際協働活動、そして地球環境学堂で進めている教育・研究・ビジネス



参加者集合写真

に関わる四つのプロジェクトの説明がなされた。

12月12日(土)に行われたワークショップは84名の参加者を得て、大学間の修士課程ならびに博士課程の共同学位やダブルディグリープログラムに関する各大学の受け入れ方針や奨学金、期間や各大学の課題など、具体的な事例に基づいた意見交換が行われた。

(大学院地球環境学堂・学舎)

『人間の安全保障』開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築」がマレーシアで国際シンポジウムを開催

大学の世界展開力強化事業プロジェクト『人間の安全保障』開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築」は11月23日(月・祝)・24日(火)に、マレーシアのマラヤ大学(UM)で国際シンポジウム「Kuala Lumpur Symposium on the AUN-KU Student Mobility Program toward Human Security Development」を開催した。

本シンポジウムには、本学、UM、ブラパ大学(タイ)、ASEAN大学連合(AUN)事務局の代表者が参加し、UMの教員や学生も多数聴講した。

1日目午前の全体セッションでは、Noorsaadah Abd Rahman UM副学長およびAUN事務局Nantana Gajasen氏との挨拶の後、縄田栄治 農学研究科教授が本事業の協働教育プログラムについて説明を行った。続いてNasrudin Abd Rahim UM教授および森 純一 国際交流推進機構長が基調講演を行った。



参加者集合写真

1日目午後から2日目は、「エネルギーと環境」「食糧と水資源」「パブリックヘルス」の三つの分野のパラレルセッションを行った。

(学際融合教育研究推進センター
(人間の安全保障開発連携教育ユニット))

松本 紘 前総長肖像画贈呈式を挙

11月22日(日)に、京都ブライトンホテルにおいて、松本 紘 前総長ご夫妻をお招きし、山極壽一 総長、西阪 昇 前理事・副学長、吉川 潔 前理事・副学長、阿曾沼慎司 理事、稲葉カヨ 理事・副学長、川添信介 理事・副学長、北野正雄 理事・副学長、佐藤直樹 理事・副学長、清木孝悦 理事、湊 長博 理事・副学長、部局長等、関係者列席のもと、松本前総長肖像画贈呈式を挙

贈呈式は、山極総長の挨拶に始まり、目録贈呈、

肖像画序幕、花束贈呈の後、制作された鶴田憲次 京都市立芸術大学ギャラリー@KUA館長から、制作にまつわるエピソードが紹介された。

最後に、松本前総長から総長時代の数々の思い出話や、現在理事長をされている国立研究開発法人理化学研究所における近況のご報告があった。

肖像画贈呈式に続いて開催した会食では、松本前総長ご夫妻を囲み、和やかな雰囲気



松本前総長ご夫妻による肖像画の序幕



肖像画と松本前総長

(総務部(総務課))

能楽鑑賞会を開催

12月9日(水)、第59回京都大学能楽鑑賞会が、京都市左京区の京都観世会館で開催された。本会は、創立記念行事音楽会とともに本学学生・教職員のための課外教養行事として毎年開催しているものである。

今回の演目は、狂言「延命袋(えんめいぶくろ)」と能「通盛(みちもり)」で、会場には毎年心待ちにされている方や初めて鑑賞される方など多くの来場者が



狂言「延命袋」

訪れた。狂言では口うるさい妻の夫に対する愛情が滑稽に表現されている場面で笑いが起こり、能の平通盛の霊や小宰相局の霊が現れ、一ノ谷の合戦前夜の悲しい別れを語る場面では、鼓や笛の音も相まって会場全体が舞台に引き込まれている様子であった。

本会を一つの契機に、特に学生に日本の伝統芸能・文化への興味と関心を一層深めてほしい。



能「通盛」

(教育推進・学生支援部(厚生課))

訃報

このたび、^{たかぎひろし}高木博司名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に氏の略歴、業績等を紹介いたします。

高木 博司 名誉教授



高木博司先生は、11月17日逝去された。享年91。

先生は、昭和23年3月京都大学医学部医学科を卒業後、京都大学大学院医学研究科修士課程、博士課程および京都大学大学院医学研究科特別研究生を経て、同27年2月に京都大学医学部助手に採用された。同28年12月には医学博士(京都大学)の学位を取得された。同29年医学部助教授に昇任、同37年7月に薬学部教授に就任され、薬理学講座を担当された。同55年5月から57年4月には薬学部長を務められた。同62年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和63年4月から平成6年3月まで近畿大学薬学部特任教授を務められた。

先生は、薬理学に関わる独創的かつ画期的研究業績を挙げられ、神経薬理学および神経生理学分野の進歩に多大な貢献をなされるとともに、日本薬理学会理事、日本神経科学協会(現日本神経科学学会)理事・集会長、日本疼痛学会理事・会長、国際麻薬性鎮痛薬会議理事を歴任され、薬理学研究の進歩、後進の教育・指導、多方面で活躍する人材育成に貢献された。特に、麻薬性鎮痛薬の作用部位や作用機構の解明をはじめ、痛覚情報伝達の物質的基礎に関する多くの研究を行い、ご自身の命名になるキョートルフィンを含むペプチド性疼痛制御物質を発見され、その優れた業績は国際的にも高く評価された。

これらの業績により、平成12年11月、勲二等旭日重光章を受けられた。

(大学院薬学研究科)